

機法の問題

曾我量深

一

大無量壽經に於ける四十八願は淨影慧遠に依ると第十二、十三、十七願を攝法身の願とし、第三十一、第三十二の願を攝淨土の願に配し、爾余の四十三願を攝衆生の願に配當されてゐる。

善導に來ると四十八願全部を莊嚴淨土の願といひ、同時に亦四十八願全部が攝衆生攝法身の願といふ。これは善導が阿彌陀の本願の特殊性を強調した所以である。

然るに我が親鸞になると第十二、十三、十七の三願は之を通じて大悲の願といふ。教行信證の行巻を見ると「然斯行者出_ニ於大悲願_一」とある。然し大悲の願はこの第十七願のみではない。古來の講録には第十七願を大悲の願の別名の如く解釋してゐるが眞佛土の巻を見ると

「謹按眞佛土者、佛者則是不可思議光如來、土者亦是無量光明土也。然則酬_ニ報大悲誓願_一。故曰眞報佛土既而有願、即光明壽命之願是也」とある。されば大悲の誓願とは第十七願のみでなく第十二、第十三の二つの願をも大悲の誓願といふ。此の光壽二無量の二つの願で眞佛土を成就された。正像末和讚には「超世無上に攝取し選擇五劫思惟して光明壽命の誓願を大悲の本とし給へり」とある。見ても大悲の願をこの三願に見て居られたことが分る。

大體淨影慧遠の見解では阿彌陀御自身の悟りに就いて攝法身の願を建てゐる。

然るにこの第十七願に於ける諸佛に稱揚されやうとは一體何を意味するのであらう。諸佛淨土の願も單なる攝法身の願意では佛の自利の願に過ぎぬ。然るに親鸞に於

てはこの願を全く異つて見てゐる。之は親鸞が深く佛願の生起本末を自ら深く掘り下けて感得したのである。一見光明無量、壽命無量には淨土など關係して居らぬやうに見える。

然るに眞佛土といふ事になると佛と土と二つある。眞佛土といふ時は佛の土といふ意味に解すべきであらう。方便化身土の方も方便化身の土と解釋すべきであらう。その中には淨土のことは書いてなくて佛様のことのみ書いてゐる。然し涅槃經などを御引用になつてゐる御精神を諍かに拜見すると之は佛土不思議の事が誌されてゐる事が分かる。

單なる佛でなく淨土の事が同時に含まれてゐる。佛は淨土の主莊嚴。淨土の象徴である。斯くして始めて大悲の願が明かになつて來るであらう。佛の大悲が自分自身を捨てて衆生を救はうとしたのが淨土莊嚴の意義である。佛身とは佛の身だけでなく、佛自身、本願全體が衆生の爲といふ時、淨土莊嚴の事行として顯はれて來るのである。光壽二無量の願は佛身の願と云ふが佛の正報のみでなく淨土全體が佛身である。日本國でも天皇は日

本の相と考へるが天皇は日本の象徴といふ時、日本全體が天皇であると解すべきであらう。佛は衆生を以つて救ひの體とする。自分は佛にならう、一切衆生を救はう、その自覺原理となるのが法藏菩薩である。法藏菩薩は我々の代表者か、佛の代表者か、普通は佛の代表者と云はれて來たが決してさうでない。助ける方の代表者は單なる助ける方の代表者ではない。

第十八願に十方衆生とあるが、その十方衆生の中に阿彌陀佛が居るか居ないかが第十八願の問題である。助ける方に屬する佛が、助かる方に屬する筈はないといふのは單純な見解である。一體之を助けるには助かる身になつて見ねばならぬ。助かる身の中に助ける人を見るのである。

眞實助かる身になつて助ける本願が成就されるのである。第十八願の十方衆生とは「我々十方衆生」といふのである。衆生の悩みを我が悩みとして衆生と同じ悩みを持つ、之が阿頼耶識である。成唯識論の中に攝物自體共同安危とある。即ち衆生をあまねく攝して自の體とする。法藏菩薩は一切衆生を自己におさめて自の體とするので

ある。安危は生死であり、苦樂である。死ぬも生きるも衆生と共にする。自分一人悟りを開かうとするのでなく衆生と共に悟りを開かう——これが法藏魂である。大乘精神の原理は阿頼耶識である。法藏菩薩は助ける佛の代表者と一應解釋されるが更に深く掘り下けると我等一切衆生の代表者である。助ける佛の代表者は救ひを求め我等衆生の代表者でなければならぬ。光明無量の願、壽命無量の願を阿彌陀如來が今更の如く何故起したのであらうか。佛が光壽二無量であることは當然であるのに。今佛願の生起本末を念じて見ると佛が衆生を救う爲に淨土を莊嚴したことが了解される。四十八願は第一に國土を標榜してゐる。その前に嘆佛の偈文が出てゐる。

即ち「一切の恐懼の爲に大安を作さん」とあり、續いてその爲に清淨無量の微妙の淨土を莊嚴しようと誓つてゐる。されば四十八願の第一願には國土を建設し第二願から國土の德によつて國中人天に德を得せしめやうと發願し第十一願には必至滅度の願、眞實悟りの願を建てその次に光壽二無量の德を成就しやうといふのが第十二、第十三の願である。

そして第十七願に來たつて諸佛の名が出て來る。

更に第十八、第十九、第二十となると十方衆生が出て來る。諸佛とは矢張り衆生が助かつて佛になつたので結局我々が救はれると諸佛になるので、眞實の念佛の行者、他力信心の者は佛になつたといふのではないが諸佛に準ずるといふことができる。第十七願は現在の地上に念佛の世界を建立しよう、この世界をして佛々相念の世界たらしめよう、此の世界を永遠に平安極樂の世界たらしめようといふことは内に光明無量壽命無量を包んで南無阿彌陀佛を稱へるものであるから念佛を稱へる人は冥々の中に光壽二無量の德を成就してゐる、成就せしめられて居る。阿彌陀如來のみが光壽二無量といふ譯でなく南無阿彌陀佛を念ずると光壽二無量の願が成就されてゐる。そして互ひに稱揚讚嘆する。稱揚するものは稱揚されるもの。他人を賞めると他人から賞められる。光明無量も壽命無量も諸佛稱名の願の中に在るのである。此は未來のこととて此の世に於て沙汰すると一益法門になると、おそれるが、佛の願ひは此の地上に佛々相念の世界を建立しようとするのであつて現在の生活と離れては佛の世界とい

つても觀念の世界に過ぎぬ。未來全體が現在に顯現されたものである。信は常に何處までも未來に在るが行の世界では未來は現在する。行は現行である。行は體につくもの、信は心につくもの。南無阿彌陀佛といふ行の方からは——云ひ過ぎかも知れぬが——諸佛の仲間である。佛に等しいからそれを佛といふ。佛と佛と相念する時、過去も未來も三世同時に現在する、之が第十七願の意義である。そこでは我々は諸佛に等しい。宇宙全法界、悉くが諸佛である。第十七願はこの現在の地上に佛國土を建設して行かうとする佛の本願を明かにしたのは親鸞唯一人である。かゝる點から大悲の願を特に光壽二無量の願、諸佛稱名の願といふのに對して第十九、第二十の願を大悲と云はず悲願とのみ云つてゐる。大悲の願も悲願も同じであらうが方便の願として一段位を下けて仰せられるのであらう。第十二、第十三、第十七の願が一組になつてゐるのに對して第十八、十九、二十の願が一組になつて、ここに法の三願と機の三願が相應してゐる。第十八、十九、二十の三願は自覺の願で我等衆生が佛になるべき因を成就する願、佛の因種の願である。それに對して第十

二、十三、十七の三願は佛の大悲救濟の願である。阿彌陀の大悲救濟の南無阿彌陀佛が成就され、この佛によつて我等が南無阿彌陀佛の根本たる佛の不退轉を戴いてそこに信心を開顯するのである。この機の三願を自覺自證の三願と云ふ所以である。この三願に於て我等衆生が佛を自覺するのである。これを三願轉入と云ふ。

二

法然までは淨土三部經は平等に本願の眞實を説くといふ。大體三經平等に眞實と云ふことは近くは曇鸞の論註に釋迦が王舍城及び舍衛城に於いてこの經を説くところ、その元は淨土論の我依修多羅眞實功德相、說願偈摠持與佛致相應である。天親は修多羅が何經であるか明かにしてゐないが、それが王舍城が觀無量壽經で舍衛城が阿彌陀經であることは明らかである。三經は眞實功德相を説く。三經が阿彌陀佛の淨土の莊嚴を説くといふのが龍樹以來七祖の傳統である。

然るに親鸞に來ると大無量壽經を眞實教、觀小二經を方便教と分たれた。そしてそれが七祖の精神と釋され

た。法然までは本願は四十八願中唯十八願、一願のみとする。善導は此の願文を若我成佛、十方衆生、稱我名號、下至十聲、若不生者、不取正覺、彼佛今現在成佛、當知本誓重願不虛、衆生稱念必得往生、と加減した。是を往生禮讚加減文と云ふ。これは道綽に於て已に見る所であるがその元は曇鸞の所謂十八願、十一願、二十二願の三願的證である。本願成就の及至一念は法然までは行の一念である。

親鸞になると本願成就といふ大きな事實に眼を開いて乃至一念を信の一念と決定された。それを明かにする爲親鸞は獨自の訓を施した。「諸有衆生、聞其名號、信心歡喜、乃至一念、至心廻向」の本願成就文を從來の讀み方を全然變へて親鸞は乃至一念と切つて至心廻向を獨立せしめた。これは親鸞が本願成就といふ意味を第十七願と第十八願との成就と見てこの一つの成就文にこの二願を見ようとする意圖である。

これを三經往生文類に第十八願第十七願を一緒にして稱名信樂悲願成就文といつてゐる所以である。本願成就とは單に本願成就と對象的に云ふのでなく本願廻向成就

である。至心廻向といふところに本願成就の事實が明白になる。本願成就の南無阿彌陀佛を成就し給へりと云ふのが親鸞の了解である。

至心廻向の根元を探つて第十七願の諸佛稱名の念佛を通して十方衆生に名號を廻向するのであると究めた。そこに本願成就の事實を感得されたのである。「十方恒沙の諸佛は、極難信の法をとぎ、五濁惡世の爲にとて、證誠護念せしめたり」といふことは一切衆生に南無阿彌陀佛を廻向しますますといふ意味である。十方衆生の稱揚讚嘆するところに南無阿彌陀佛を大行と親鸞は感得なされたのである。

親鸞は亦一方機を開顯して第十八願を本願三心の願、至心信樂の願と云ふのに對して、第十九願を至心發願、第二十願を至心廻向の願と名づける。ここに三願轉入の原理を發見された。大體第十八願は念佛往生の願といふがそれだけでは念佛の意義が明かにならぬ。その念佛を我等の機から奪つて諸佛稱名の上に大行として移した。これについて最も注意すべきは第二十願である。我々の自力の妄念妄執は非常に深い。そこで念佛といふものを

與へて、その念佛の鏡に照されてその深さ、その遠さを自覺せしめやうといふのである。自力の無力は一應分つたがその妄執は尙頑強である。廢つたやうで廢らぬ。心から頭を下けぬ。そこに第二十願果遂の誓願の働く場所がある。この事は親鸞が始めて明かにされた。善導の玄義分の序題には、「然婆婆化主因其請故即廣開淨土之要門、安樂能入顯彰別意弘願」とある。その要門とは定散二善、弘願は大願業力の救濟である。親鸞はその精神を明かにして觀經を第十九願に配當し第十八願を大無量壽經に配當した。觀經は大體觀佛三昧を主として居る。その中心は第九眞身觀に歸着する。

之は第十九願の「設我得佛、十方衆生、發菩提心修諸功德、至心發願、欲生我國、臨壽終時、假令不與、大衆圍繞、現其人前者、不取正覺」と符合してゐる。行に就いて云へば修諸功德、信について云へば至心發願である。されば信の第十八願の至心信樂に要弘二門の教相を善導や法然は建てたのである。十九願は諸行往生であり十八願は念佛往生であると云ふ可きである。第十八願は法藏菩薩が五劫思惟の末に衆生往生の行を選びとつた。之

が十方衆生の往生の業であると決定された、何故第十九願が諸行往生の願であるか、それは直ちに第十八願に入れぬものを方便して導く願であるからである。「諸善萬行ことごとく至心發願せるゆへに往生淨土の方便の善とならぬはなかりけり」即ち諸善萬行をしては佛になる自信はないので結局阿彌陀の淨土に生れて、淨土で修業して佛にならうといふのが第十九願である。念佛の本願を直ぐに頂けぬものは九品の淨土に生れる。一人々々が皆異つた階級の淨土である。この世界は一人々々が皆異つた考を持つてゐるが結局この世界も一つの化土であらう。親鸞は善導や法然の精神を徹底してこの世界の諸行往生の行を方便と決定した。第十八願を楯にとつて念佛を稱へて淨土に往生しようと固執するその自力執心を看過できない。そこに佛の深い方便を發見された。これが第二十願である。第二十願は一つの化城である。この化城によつて我々に懺悔道を成立せしめようとするのである。第十九願のみでは懺悔道は成立しない。即ち第十七願と第二十願とは相應的關係をなしてゐる。第十八、十九の行々相對の教相は既に善導、法然の明かにするところだ

あり、その背景には全く自力と他力とが對立してゐる。今第二十願を拜讀すると「設我得佛、十方衆生、聞我名號、係念我國、植諸徳本、至心廻向、欲生我國、不異遂者、不取正覺」とある。この植諸徳本とは念佛である。心は自力である。念佛の功を我がものにする。この至心廻向は本願成就文にもある。全く同じ言葉である。之は何故であらうか、此處に親鸞が成就の文に「至心に廻向したまへり」と讀まねばならなかつた必然性がある。法然まではこの第二十願が如何なる意味を持つかという事が判然しなかつたので本願成就の至心廻向を至心に廻向してと訓ぜられた。親鸞に來ると第十七願のところに至心廻向の南無阿彌陀佛が成就されて我等に至心に廻向したまへりと戴くのである。更に詳説せば自力の極るところに本願他力を戴くのである。されば第二十願の至心廻向と本願成就の至心廻向は別のものでなく第二十願の自力の至心廻向の極限の處に本願力廻向といふ廣大無邊の事實を始めて戴くといふのが本願成就文の眞精神であらう。自力の至心廻向と他力の至心廻向とは無關係ではない。第十七願の念佛によつて我等の罪の深いことを知らしめられる所に自力を超えて他力を興へて下さるのである。我等に

素直に至心信樂など出来るものでない。眞實懺悔道の所に他力の信を感得するのである。他力の信のみあるのではなく、自力の信を知らしめて頂くのが他力の信である。何處までも自力を募らうとする、然るに法の大悲がそれを叩く、その一つの閃きであらう。自分が稱へても諸佛の教といふ所に第二十願の聞我名號が本願成就の文に聞其名號となつて來る所以がある。誠に第十八願成就文と第二十願とは裏と表の様な關係をなしてゐる。本統に如何することも出來ぬといふ所に諸佛の教を聞くより外ないことが分る。そこに不可思議の他力の行信、大行大信が廻向成就せしめられる。そこに法然の第十八願一願建立を親鸞は法に第十七願、機に第廿願を聞いてその眞精神を徹底されたのである。自分の心には信心の種はない。全くの一闡提である。唯除五逆誹謗正法の淺間しい相を第二十願で聞かして頂く。何處までも自分の稱へる念佛でない。全く佛の教の言葉である。第二十願を戴く時第十八願が第十七願に變る。我等が念佛を稱へるのでなく自分の念佛を否定して諸佛の教の徳に歸す、それが佛教であつてそれ以外に佛の教はない。この事を明らかにしてゐるのが大無量壽經の眼目である。(責在聞書者)